



慶應義塾大学岡原正幸研究会

教授 岡 原 正 幸

——「こもろ映画祭に思う」——

数年前から慶應義塾大学文学部のゼミ（岡原研究会）では小諸市や小諸の皆さんとの関係を築いてきました。その土台の上に、学生たちが発案し実現することのできたイベントがこもろ映画祭です。

この映画祭の実現プロセスは、そうはいっても紆余曲折、学生は自らの頭で考え、自らの手と足でひとつずつ課題をクリアしました。人のつながりを実感しながら企画を進めました。そのプロセスは学びそのものです。教師や大人から与えられた課題を解くのではなく、自分自身で課した具体的な目標を達成していく実行力を培うことは今の大学教育に最も求められるものです。他方、小諸の皆さんにとって、他所から来た若者の目を通じて、新たな小諸が見つけ出されるとしたら、それは新鮮な喜びではないでしょうか。こもろ映画祭が単なる映画祭ではなく、学びであり発見であること、そのことが強く実感されました。



▲映画のワンシーン

こもろ映画祭グランプリ受賞
監督 齊藤 友和さん（日本大学）

夏にロケハンで初めて小諸に訪れて、田んぼに挟まれた1本道に立った時に、ひとりぼっちの夢の世界に迷い込んだ感覚がしました。ひとりだけど自然が与えてくれる優しさや暖かさがある。その感覚を表現するために、登場人物の2人以外が映像に写り込まない様に撮影しました。そして市民の皆さんにも、こんな場所があったんだと思ってもらえる場所で撮影したいと思い、「ここは小諸だ」とわかる場所では撮影をしませんでした。見慣れた場所がカメラを通すと、こんなにも違う場所に見えるんだと思って頂けたら嬉しいです。

小諸の街は、全体が暖かく色鮮やかなど感じました。豊かな自然の色鮮やかさ、小諸に住む方々の優しさから来る温かさ、全てが調和して多幸感あふれる空気で溢れていました。そして時間がゆっくりと流れていて、この場所で過ごす人達はどんな些細な日常であっても、一瞬一瞬をととても丁寧に過ごしているように感じました。自分の目の前に広がるたくさん出来事や、日々出会う多くの人々に丁寧に向き合う環境がある。そんな当たり前だけど、見失いがちな日常があるという事が小諸の一番の魅力だと思います。

そこに住む人、住まない人の視点が交わることで発見、再認識される小諸の魅力。人と人とのつながりが次なる出会いをつくり、またその輪が広がる。その輪は、時として思いがけない力を生み、地域に活力を生み出す。

首都圏に通うたった一人の学生が「小諸」を口にしたことがきっかけで「こもろ映画祭」が開催されました。

逆に、たった一人の学生が「小諸」を口にしなかったら、この映画祭は開催されず、この「つながり」もできていないと考えられます。

「小諸を想う」きっかけが、この「つながり」をつくりました。また来年も、この映画祭は開催される予定です。

